

“今を生きる Statesman”として『今の日本』について考えてみませんか

平成 24 年 8 月
平成 24 年度浩志会研究会員代表幹事
佐々木雅人(経済産業省)

1. 「問題意識」の根底・背景にあるもの

(1) ロンドン五輪が終わって - 『チームジャパン』って結構やるじゃないか！

平成 24 年 7 月 27 日、ロンドン五輪が開幕。寝不足の日々が始まった。

「五輪史上初めて、男子柔道で金メダルなし」との暗いニュースで始まったロンドン五輪は、終わってみれば、金メダル数こそ目標に届かなかったものの、2004 年のアテネ五輪を超え、メダル数 38 個という史上最高のメダル数を獲得して幕を閉じた。

なでしこジャパンの活躍は言うまでもないが、その他にも、44 年ぶりの男子サッカーの準決勝進出、28 年ぶりの女子バレーボールでのメダル獲得に加えて、日本の五輪史上初となる女子卓球団体や男子フェンシング団体でのメダル獲得、男子水泳 400m メドレーリレーや女子アーチェリー団体等々、元々個人競技である種目においても、『チームジャパン』として戦った結果としてのメダルが目立ったような気がした¹⁾。

また、今回のオリンピックは、メダリストが、過去最多となる 13 競技にわたっている。確実にスポーツのすそ野が広がっているということらしい²⁾。これまで最多は 2004 年アテネ五輪の 10 競技。マイナー競技の躍進の背景には、政府による支援として、国立スポーツ科学センターや味の素ナショナルトレーニングセンターが設立されたことの影響が大きいとの分析が多い³⁾。日本のアマチュアスポーツは、企業スポンサー中心に支えられてきたところ、遅ればせながら、国による「支援」体制強化の結果として、今回の五輪におけるマイナースポーツの躍進があるということのようだ。

マスコミの報道も、当初は「また男子柔道金メダルを逃す」的な報道が目立っていたが、途中から「日本勢・メダルラッシュ」、「五輪史上最高のメダル数獲得か？」的な前向きな報道に変わっていったように見えた。マスコミに言われるまでもなく、『日本、結構いけるじゃないか』、連日、眠い目をこすりつつ出勤しながら、そう思っていた。

(2) 『ニッポンの良さ』・『日本的価値観』(一考・私見)

「ニッポン人気、新興国に広がり」

日本のポップカルチャーが世界に着実に浸透していることを報じる記事が日本経済新聞に掲載された^{iv}。アニメやコミックを通じて、日本語や日本文化に関心を持つ人が増えているという。日本食人気も、古い例だが、その一つ。同記事の中で、「日本のポップカルチャーは幅が広く深い。現代日本の生活様式や日本人の考え方とも結びついていて興味深い」とする米アニメ情報サイトのコメントが紹介されている。日本のアニメの良さは、単なる絵柄の美しさやストーリー展開の面白さだけではないということだろう。また、同記事では、「アニメの中に描かれている現代日本の生活様式や言葉、食べ物に関心を持ち、日本ファンになる例がとても多い」という、日本語学習や短期留学などを支援する企業の共同創業者のコメントも紹介されている。

とある別の日の日本経済新聞「春秋」欄で、初めて日本代表チームが出場したサッカーの 1998 年仏ワールドカップで、熱心な応援の後でスタンドのごみを集めている日本人サポーターの姿が、驚きと称賛をもって海外メディアに取り上げられたことが紹介されている^v。東日本大震災の際における、「互いに支えあおう」とした被災地域での『共助』の取り組み、「日本人としての“絆”」を感じて日本各地から集まったボランティアの無私の働き・貢献、更にはあれだけの混乱の中で秩序が守られていたことなどが、世界から賞賛と驚嘆の目で見られていたことも記憶に新しい。

一方、宗教学者の山折哲雄氏は、選民思想や進化論にもつながりうる、犠牲を前提にして生き残りを図る思想が根本にある「西洋思想」と、誰かの犠牲のもとに生き残りを図るのではなく、全員を平等に扱うことを基本に据えつつ、仏の教えに従って全員が救済の船に乗れるとする仏教的無常観と、その両方を知っている(東西双方の価値観を知っている)日本人への期待がいずれ高まってくるのではないかと、両方の文明の「かけ橋」になれるのかもしれないと述べている^{vi}。

同じようなことは、かつて滞在していたイランの知識人層の人々にもよく言われた^{vii}。元来、東洋的価値観に近かったペルシャ文明の価値観を持っていたイランの人々は、パフレヴィー朝のシャーによる急激な近代化・西洋化及びイランの伝統的価値観の崩壊を目の当たりにして、「反シャー革命」としての『イラン革命(1979 年)』を起こしたと考えられている(いわゆる「イスラム革命」としての性格は後付けという理解)。そんな経験をしたイラン人からすれば、「日本は、なぜ明治維新以降、急速に西洋化が進み、第二次大戦後の米国占領時代まで経験したのに、日本的価値観・日本文化を失わず、

西洋的価値観と共存させることができるのか。なぜ、日本的(古い)価値観を維持しながら、いわゆる西欧的な価値観を取り入れた成長が実現できたのか」と不思議がられるとともに、「日本の経験に学びたい」と何度となく言われた。

この他にも、価値ある『日本的価値観・倫理観』には、いろいろあるのだろう。

新渡戸稲造の『武士道』では、日本の武士道の核は「仁」についての独特の考え方にあるという。すなわち、弱者・敗者・劣者に対する無限の同情と共感こそが「仁」の最も大切な要因であるといい、そこに日本人の倫理感覚と宗教信条の源泉があると論じられているが、こうした思想も『日本的価値観・倫理観』の一例だろう。

「(失われつつあるかもしれないが)日本人が常識の一つとして持っている、“価値観・倫理観”なるものがあり、それが、極めて貴重な、価値あるもののように思える。

(3) 『過度な悲観論に支配されることなく』 / 『大衆討議』の危険

一方、日本のマスコミには『悲観的』見解・情報があふれている。

中国の急速な経済発展及び、経済発展を背景とする政治・外交面での影響力拡大を目の当たりにして、『“ジャパンバッシング”から“ジャパンパッシング”へ』などという論調も広まっているし、また日本国内の状況についても『日本の自殺再考^{viii}』など、日本に迫る内部崩壊の危機が強く意識され、また民主党政権になって3年近くが経過した現在の日本国内の政治情勢を見て『決められない政治』と嘆く等々、日本国内で出回る『悲観的見解(情報)』は、枚挙にいとまがない。

新聞の経済面を見るだけでも、2011年には、『世界第二位の経済大国から脱落』し(1968年以来、43年ぶりに中国に第二位の地位を明け渡す)、また同じ2011年には、1980年以来31年ぶりに『貿易赤字国に転落』、更には平成24年上半期に『過去最大の貿易赤字を記録』(2兆9千億円あまり^{ix})するとの記事など、日々、「今ある危機(構造的問題)」への警鐘を鳴らし、日本国民に「危機意識」を(場合によっては必要以上に)喚起するような、『悲観的見解(情報)』の伝達が多いように見える。

しかし、本当にこうしたマスコミの論調は、世の中で起こっていることをフェアに、ニュートラルにとらえているだろうか。こうしたマスコミの論調を目の当たりにした日本国民は、今の日本・日本国民を取り巻く状況について正しく理解できているのだろうか。

経済面だけを見ても、

日本は中国に GDP 世界第二位の地位は明け渡したものの、一人当たり GDP で見ればまだ日本は中国の 10 倍近くもある^x、という事実や

日本は貿易赤字に転落はしているが、経常収支は依然として黒字であり(2011年:9.6兆円の黒字)、経常収支が黒字であるかどうか、その国が健全であるかどうかの第一義的なメルクマールになる、という経済学の常識^{xi}

等に基づいた視点も広くシェアされてしかるべきではないか。また、欧州経済危機の深刻化の中で、一部ではあるが、日本経済を再評価する見解も出てきている^{xii}。

他方、かつてないほどに、テレビには数多くの『報道的バラエティー』番組が流れている。こうした番組で扱われるネタは「悲観的見解(情報)」がほとんどで、上述したような冷静な専門家による見解などはめったにお目にかかれない(専門家にとっては当たり前なものでも)。報道的バラエティー番組は、お茶の間に連日・終日流され(本当に朝・昼・晩、常に流れているといっても過言ではない)、必ずしも専門家と呼べないコメンテーターの登場も多い(自らの見解に基づいてコメントするのが通常)。当然、議論の“質”については疑ってかからざるを得ないが、国民が、こうした情報を、こうした形で伝達されていることを我々はどう考えるべきなのか。

もちろん、日本に構造的な問題があることは事実。しかし、ニュートラルな議論・冷静な議論とはかけ離れた、専門家による冷静な議論ではない、「大衆討議」的で、かつ「過度に悲観的見解」に偏ってしまう危険性をはらむ『議論(情報)』が世の中を席卷してしまっているように見える中、我々はどうするべきなのか。

(4)『思い』の発露

ずいぶん前置きが長くなってしまいました。

日本の政治・経済・社会に対する『悲観的見解』が横行する今の時代。

「バブル崩壊」「金融破たん」「リーマンショック」そして「2011年3月11日、東日本大震災・東京電力福島第一原子力発電所事故」の発生・・・日本は“とどめ”を刺されてしまったのでしょうか。日本は立ち直れないのでしょうか。本当に我々は、日本は、日本人は、もうダメなのでしょうか。日本に明るい未来はないのでしょうか。

そんなことはないと思います。皆さんはどうですか？

世界中のだれもが日本に同情した「3.11」。

僕らは何を目の当たりにしたのでしょうか？

日本を助けようとする「友人」の存在。そして何より、日本人同士が支えあおうとした「他者を思いやる気持ち」と「日本の人々の団結、そして“絆”」。これこそが日本の『底力』ではないでしょうか。それを僕らは目の当たりにしたのではないのでしょうか。これが世界から評価されたのではなかったのでしょうか。

東日本大震災発災から 1 年半近くが経過していますが、復旧・復興の道はまだ半ばであり、まだまだやらなければならないことが山積している状況ではあります。でも、今、このような時代だからこそ、「日本の良さ」・「日本の潜在力」について、きちんと認識した上で、明日の(自らの)行動につなげていく必要があるのではないのでしょうか。「明日への活力」の一つとして、「今という時代の日本と日本国民」を改めて見つめなおし、きちんと認識をしておく必要があるのではないのでしょうか。

2. 検討課題(『共通テーマ』)

昨年度、浩志会研究会員は、「東日本大震災発生後初の入会世代」として、『危機を乗り越える我々の力』というテーマを与えられました。東日本大震災という未曾有の危機を目の当たりにし、何に気づき、何をなすべきなのか、どのような力を伸ばし、未来に貢献すべきなのかについて、「東日本大震災」という出来事に対する理解からスタートし、自らが何をなすべきかについて考えを深めていく形で議論しました。一昨年は「30年後の日本を見据えて我々は何をなすべきか」というテーマで、「未来・将来」という視点から、今に立ち返る形で(行動につながるような)議論が行われてきました。

そこで、今年度は、

「危機意識」(構造的問題への対応)という視点から一度自らを『解放』して見つめ直すと(但し、議論を進めていく途中で立ち戻る必要性は発生する可能性が高いと思いますが)、
「日本という国・日本人という民族」がどう見えるのか(長所/短所、特質、自らの評価と外から与えられている評価、、、等々)

他の誰でもない「自分という個人」・「浩志会員という集団」とは、どのようなものなのか、どのようなものだとして理解すべきなのか

「未来」・「過去」という今を生きている我々にとって現実味のない『時』ではなく、『今』がどういう時代なのか(勿論、今を考える上で、これまでの歴史、目指すべき未来・将来を考えざるを得ないとは思いますが、あくまでも「今」の評価・理解について議論していただきたいと思っています)、

そして我々は『今』、「何をしたいと思うのか」、「何を目指しているのか」

について、皆さんで議論をしてみたいと思うに至りました。

もう少し、テーマを「因数分解」してみると、

- (1) 『日本・日本人』が置かれている現状、今の『僕ら』の立ち位置をどう理解すべきなのでしょうか？ 日本の「政治」・「経済」・「外交」・「文化」・「歴史」等々について、「自分(の経験・体験)」という視点で「日本という国家・日本人という民族」がどのような性格・特徴を持つものだと理解すべきでしょうか？ 同じように、「(浩志会に集まっている)自分自身・自分達」はどういう人・集まりなのでしょうか？

僕らの周りの環境との関係をどう捉えるか

「世界の中の日本 / 周辺国との関係の中における日本」、「日本の近現代史における“今”の位置づけ」をどう理解するか

日本の弱さ・日本の欠点を認識し、その弱点・欠点の解消に向けて努力する覚悟を持ちながらも、とかく「欠点」や「問題」から議論が始まりがち(議論の軸足を置いた)、「日本・日本人」について、潜在力・価値(“長所”)という視点をより強く意識することで、ニュートラルかつ冷静に見つめ直してみてもどうでしょうか。

- (2) 『今』という時代をどうとらえるべきなのでしょうか？

これまでの歴史・これからの未来を冷静にかつニュートラルに分析をした上で、『今』に軸足を置いて改めて考えると、『今という時代』はどう捉えられるのでしょうか。どう捉えるべきなのでしょうか。

『今』に軸足を置いて改めて考えると、今、漠然と自分で持っている「歴史観」・「未来観」は変わるのか、変わらないのか

「過去・歴史」と現在の関係はどう見えるのか、「今」の先にある「未来・将来」との関係はどう見えるのか

過去を振り返ること、過去を反省することにとどまらず、また今を飛び越えて『未来』を考えるのではなく、あくまでも現実のものとして、目の前に厳然としてある「今」を見つめなおしてみてもどうか

『日本・日本人』の「過去」・「現在」・「未来」の関係や、前の世代と今の世代・将来の世代との関係(「人」・「社会」という視点を強く意識してみると)において、

『今という時代』はどう見えるのでしょうか。どう考えるべきなのでしょうか。

- (3) 皆さんが持っているであろう“Statesman としての公共心”に素直に従うと、今、我々は何をしたいと思うのでしょうか、何を目指したいと思うのでしょうか？

まずは、自らを所属する組織から解放し、Statesman としての純粋な気持ちに立ち返ると、自らの行動についてどう考えることになるのでしょうか、考えが変わるのでしょうか、変わらないのでしょうか

また、日本が抱える構造的問題への対処療法的なものではなく、問題は問題として意識しつつも、日本の良さ・潜在力をより強く意識すると、『そうあってほしい、そうであるべき、輝く日本』の構築のために、何をしたいと思うようになるのでしょうか？

これまでの日本を作り上げてきた世代や将来の世代・次の世代を意識しつつも、あくまでも“今”を生きる『自分たち』の問題・行動として、我々は『今、何をしたい』と思うのでしょうか、『今、何を指したい』と思うのでしょうか

今回は、フォーラム別のサブテーマの設定のようなことはいたしません。皆さんで自由に、かつ楽しく議論をしていただければと思っています。

3. 終わりに

最後に一言だけ。

誰から押し付けられるわけでもなく、『自らの自由意志』(やりたいことをやる)に基づくものとして、「自分たちが求められていること・なすべきこと・やりたいこと・目指したいこと」を議論していただきたいと思っています。「何をすべきか」ではなく、「何をしたいのか」、あくまでも自らの自由意志を大事にしていただけたらと思います。

この1年間の皆様との議論を通じて、明日の自らの行動を規律する(自らの行動に影響を与える)であろう『認識』・『理解』の醸成を目指したいなあと考えた次第です。

私自身、テーマを書くにあたって色々考えましたが、事ここに至っても考えがまとまっていない部分が多々あると思います。途中でも、どこでも結構です。「テーマ」の理解等について、何かご質問等がある場合には、いつでもお声をかけていただければと思っています。これから1年間皆さんとともに楽しく議論をし、楽しい浩志会活動を作り上げていければと思っています。よろしく願いいたします。

【脚注】

- i 産経新聞 平成 24 年 8 月 10 日朝刊 3 面「躍進『絆ジャパン』」など。
- ii 朝日新聞 平成 24 年 8 月 13 日朝刊 2 面
- iii 例えば、読売新聞 平成 24 年 8 月 13 日朝刊 3 面など。
- iv 日本経済新聞 平成 24 年 8 月 13 日朝刊 6 面
- v 日本経済新聞 平成 24 年 8 月 9 日朝刊 1 面
- vi エコノミスト 2011 年 11 月 1 日号 47 ページ
- vii イランには 2002 年から 2005 年まで滞在していました(在テヘラン日本大使館にて勤務)。
- viii 朝日新聞 平成 24 年 1 月 10 日朝刊 1 面に、朝日新聞主筆が『日本の自殺』がかつてなく現実味を帯びて感じられる」と書き、文芸春秋は、平成 24 年 3 月特別号 94 ページに 1975 年に同誌に掲載された論文を再掲した。
- ix 平成 24 年 7 月 25 日発表 財務省報道発表
- x その意味などについては、DIAMOND Online 特別レポート(11 年 1 月 28 日)
<http://diamond.jp/articles/-/10933> 等参照。
- xi <http://diamond.jp/articles/-/16122> (12 年 2 月 14 日) 等参照。
- xii 例えば、日本経済新聞 平成 24 年 7 月 23 日朝刊 1 面や、日本経済新聞 平成 24 年 8 月 13 日朝刊 2 面など。